

コートさん

卯月紺

「ねえ、この近くで出たみたいだよ」

友人の言葉に、私は先ほどまで問題集に向けていた視線を彼女に移した。問題に飽きた彼女は、スマホをいじっている。

「何が？」

「コートさん。ほら、小学生の時に都市伝説的なのではやっただじゃん。今、後輩の SNS 見てたら目撃情報があって」

コートさん。

それは、小学生の時に広まった話。

夕方、一人でいると大きなコートと帽子を身に付けた顔なし男に出会う。すると彼のコートに入れられるという。

コートの中は異世界になってるとか、中にいる怪物に食べられるとか、コートから出ると何年も経ってたとか、話のバージョンは様々だ。

一時期は不審者情報とも重なって、集団下校になったこともあった。

「……そういえばあったね」

「今思うとき、多分普通に不審者だったんだろうね。小さい子だったら大人のコートに隠せるし。誘拐犯だったのかもよ」

気をつけないとね。

その彼女の発言に、私は思わず小さく呟いた。

「……あの人は、そうじゃないよ」

「ん？ なんか言った？」

「なんでもないよー。ほら、早く終わらせちゃいなよ」

「はい」

私たちはまた問題集を続けた。

だけど私は、頭の隅で別のことを考えていた。

昔、ノートの際に描いた空想のものを。

内気で、絵ばかり描いてる子供。それが小学生の私だった。今は何人が友人がいるが、当時は一人もいなかった。

家に帰っても両親は仕事で、一人ぼっちで家にいるのは寂しかった。

だからいつも、閉館ギリギリまで図書館にいたり、公園で絵を描いていた。

確かその日は、図書館が休館日で公園にいた。

寒い、北風の吹く日だった。

私はめくれそうになるノートを押さえつけながら絵を描いていた。

寒かった。暖かい場所で包まれたかった。家にはまだ、帰りたくなかった。

ごうごうと吹く風が、頭の中にも侵入して唸り声をあげていた。

脳みその中の唸り声と、冷たい吐息。

それを追い出したくて、頭の中に生まれたものを鉛筆でひたすら描いていた。

描いて、描いて。

ふっと、後ろが寒くないことに気づいた。風がやんだのか？

いや、誰かが、大きな誰かが立っている。

恐る恐る振り返るとそこには。

大きなコートとマジシャンが持っているような帽子を身に付けた男が立っていた。

私は少し後ずさった。びっくりしたのだ。しかし、恐怖は感じなかった。

男は夕焼け色の鮮やかなコートを着ていた。帽子はコートの上に直接乗っていて、顔は見えなかった。いや、ないかもしれない。

その帽子、本来なら顔に当たるところから男は声を発した。

「こんにちは、お嬢さん」

「……こんにちは」

低く、ゆっくりした声。

男はしゃがんで私と、目があるかわからないが、目線に合わせて。

「寒くないのかい？」

「ずっといたから、慣れてきたけど……少し、寒い」
言ってしまうと、急に寒さが、腹の底からじわじわと攻

めてきた。こんなに、寒かったらどうか。

「ああ、それはよくない。寒いと体以外にもいろんなところが冷えて凍ってしまう。暖かい場所に入らないかい？」

「暖かい場所？」

「そう、このコートの中とかさ！」

男がコートの裾をめくると、そこは真っ暗だった。

夜空のような暗さで、ふんわり暖かい空気を感じた。

知らない人の誘い。

学校で言われたことに従うなら、断るべきだ。でも、私は。

小さく、頷いた。

「でも、名前を聞いてもいい？」

「うん？ どうしてだい」

「名前を聞いたなら知らない人じゃなくなるから」

「ふむ、そうだね。じゃあ、コートさんと呼んでくれるかな」

「コートさん……」

私は、コートさんのコートの中に入り込んだ。

中は思ったよりも広く、暖かい。

私は、膝を抱えて座った。

シンとして、唸り声も聞こえなければ、吐息も感じない。

ここは、世界一安心できる場所だ。

外から、コートさんの声が聞こえる。

「少し、お話しようか」

コートさんは、あのゆっくりした声でお話を始めた。

何を語っていたのかは覚えていない。

ただその声は、とても心地よくて。

私はゆるゆるとまどろみの中に落ちていった。

気づくと、私は公園の椅子で目を覚ました。

風は止んでいて、体は心なしか温かい。

帰りのチャイムがなっていて、私は慌てて家へと帰った。

夢でも見ていたのだろうかと思っていたが、家に帰って

ノートを見ると描いた覚えのないコートさんの絵があった。

いつからか、コートさんの話を聞くようになった。

やっぱりいたんだ、と思うと同時に分らないことがあった。

た。

コートさんの絵のことだ。

私は、コートさんに会ってからこの絵を描いたのだろうか。会う前に描いた気もする。もしかしたら私がコートさんを外に出したのかもしれない。あのコートの中は絵の中だったのかもしれない。

私はコートさんの話を聞かされた時に、何か言いたいような、何も言えないようなもどかしさに襲われていた。

そのうち噂も風化して、語られなくなった。

私も忙しくなり、あまりそのことを考える機会は減った。

ただあの絵を描いたノートは、今でもなんとなく持ち歩いてる。

友達と別れた後、久しぶりにあの公園にいった。あの頃より遊具の数は減っているが、あの椅子はあった。

腰掛けて、ノートを開く。

他の絵と比べてコートさんの絵は、ずいぶん丁寧に描か

れていた。絵の中なのに、その存在はきちんとあった。

北風が唸り声を上げる。

耳から頭に、それが侵入する。

また、冷えていく。

耳を大きなものが覆った。

大きな、男の人の手だ。

それと、懐かしい声。

「お嬢さん、こんばんは」

「……こんばんは」

「寒くないのかい？」

「寒い、です」

「暖かい場所はいかがかな？ 例えば、このコートの中とかさ！」

振り返る。

めくれ上がった夕焼け色のコート。

夜の黒。

私は、小さく頷く。

「知らない人は嫌だから、名前以外も教えてくれますか？ コートさん」

「うん。お話は沢山あるから寝ないようにね、お嬢さん」
夕焼け色のコートに、私は吸い込まれる。
シンとして暖かい闇が、包み込んだ。

終わり